

令和 7 年度 大学等と地域が連携して取り組む地域課題解決プロジェクト
(ふるさとミライカレッジ)

若者の視点を取り入れた
「学びを軸とした地域構築の実践」
プロジェクト

成果報告書

令和 8 年 3 月

新潟県十日町市

目次

1. プロジェクトの概要.....	1
1.1 背景	1
1.2 地域課題	1
1.3 プロジェクト及びフィールドワークの内容	2
1.4 目標とする地域の成果	2
2. プロジェクトの具体的成果.....	4
2.1 プロジェクトの成果サマリ.....	4
2.1.1 主体形成	4
2.1.2 ネットワーク形成	4
2.2 プロジェクトおよびフィールドワークの活動実績	5
2.2.1 ふるさとマルシェを核とした地域魅力発信・交流拠点づくりプロジェクト	5
2.2.2 農的くらしの学びと継承の拠点づくりプロジェクト	7
2.3 地域の成果と今後の展開.....	9
2.3.1 目標とする地域の成果に対する評価.....	9
2.3.2 今後の展開	10
3. プロジェクトの実施体制	11
3.1 プロジェクト体制の全体像.....	11
3.2 プロジェクト体制内の役割	11
4. スケジュール	13
5. プロジェクトを通じて得られた効果.....	15
5.1 地域における効果.....	15
5.1.1 プロジェクト前後の変化.....	15
5.1.2 得られた示唆.....	15
5.2 自治体における効果	15
5.2.1 プロジェクト前後の変化	15
5.2.2 得られた示唆	15
5.3 大学における効果	16

5.3.1 プロジェクト前後の変化	16
5.3.2 得られた示唆	16
5.4 学生における効果	16
5.4.1 プロジェクト前後の変化	16
5.4.2 得られた示唆	17

1. プロジェクトの概要

1.1 背景

十日町市では、高齢化率 50%を超える集落が約3割にのぼり、特に中山間地域を中心に各集落の存続は喫緊の課題となっている。一方で、アートを活用した地域活性化策の草分けとして「大地の芸術祭」が四半世紀にわたり開催され、地域固有の文化や歴史の価値、集落の課題がアートを介して掘り起こされて、人間や自然の本質を捉えた作品の数々が地域資源となっていることは本市の大きな特徴である。

「大地の芸術祭」への関わりをきっかけとして集落支援の活動を継続している大学と本市との関係を基盤に、「大地の芸術祭」(芸術)と「棚田」(農)という、本市ならではの地域資源を活かし、若者が関わり続ける仕組みを作り、過疎高齢化が著しい中山間地域の集落維持につなげることを目的に本プロジェクトを実施した。

1.2 地域課題

十日町市では人口減少と高齢化が進行し、特に中山間地域では顕著であり、後を継ぐ担い手がいないう集落が増加している。このままでは集落の維持が難しくなることに加え、棚田をはじめとする農業の担い手が減少し、良質な米づくりや農的暮らしの継承が困難になることが懸念されている。こうした状況は、単に農業生産の問題にとどまらず、「農的なくらし・生活の知恵」や「互いに助け合う昔ながらの慣習」、さらには「住民自らが楽しみを創り出そうとする地域文化」など、持続可能な社会を支えてきた暮らしの基盤そのものの喪失につながるものであり、地域の誇りの喪失にもつながりかねない。また、地域内では商店の閉店が相次ぎ、生活利便性の低下とともに地域コミュニティの活力低下も課題となっている。

一方で、本市には大地の芸術祭を契機として地域に関心を持ち、地域おこし協力隊として活動する人材が多く存在しており、協力隊員の約 25%が芸術祭や農的暮らしへの関心をきっかけに本市に関わっている。また、地域おこし協力隊と地域とのマッチングを支援する中間支援組織「(一社)里山プロジェクト」のコーディネート機能により、協力隊の退任後の定住率も全国平均を上回る約 70%と高い水準にある。しかしながら、こうした取組が市内全体の集落維持や地域活性化に十分に結びついているとは言い難く、地域おこし協力隊の活動を地域の担い手育成や新たな地域経済の創出につなげていく仕組みづくりが課題となっている。

また、本市には大学がないため高校卒業後に若者が市外へ流出する傾向が強く、地域と若い世代との関係をどのように構築していくかも重要な課題である。一方、ICT 社会を生きる若い世代の中には、自然と共に営まれる暮らしやサステナブルな社会の在り方に関心を持つ層も多い。こうした背景を踏まえ、県外大学生の学びや活動を契機として地域との関係を構築し、本市を「ふるさと」として関わり続ける若者を増やしていくことが求められている。

そのため、大学生の活動を起点に、地域おこし協力隊や地域住民、地域資源といった多様な主体との有機的なつながりを構築し、域外の若者が継続的に地域に関わる仕組みを形成していくことが、本プロジェクトにおける地域課題となっている。

1.3 プロジェクト及びフィールドワークの内容

本プロジェクトは、十日町市ならではの地域資源を「学び」の資源として活用し、大学生や地域住民、地域おこし協力隊など多様な主体が関わる実践型フィールドワークを通じて、地域の担い手が循環的に創出されていく仕組みの構築を目指すものである。対象とする資源は、①「大地の芸術祭」の作品群や人的資源、②日本有数の豪雪地帯で培われてきた暮らしの知恵や助け合いの文化、③棚田がもたらす「農的暮らし」の価値の3つであり、これらを地域固有の学びの資源として位置づける。

プロジェクトでは、外部人材として関わる大学生に加え、地域住民や地域おこし協力隊が協働しながら地域の価値や課題を学び合う「学び合いのコミュニティ」の形成を目指す。大学生が地域の暮らしや文化に触れながら主体的に関わることで、地域への理解と関心を深め、継続的に地域と関わるきっかけを生み出すことを目的としている。

具体的には、市内において既に大学と集落との関係が築かれている2つの地域をプロジェクト拠点とし、学生の専門分野の学びを生かしたフィールドワークを展開する。活動では、地域資源の掘り起こしや地域住民へのヒアリング調査を通じて土地への思いや暮らしの文化を学ぶとともに、地域おこし協力隊と協働した地域活動に取り組む。

これらのフィールドワークの成果をもとに、地域の人々とともに地域資源の魅力を発信する「ふるさとマルシェ」や、地域文化や暮らしの知恵を学び合う「集落のガッコウ」といったプログラムを企画・運営することとした。これらの取組により、地域内外の人が関わる交流や学びの場を創出し、地域の価値を共有する機会を広げる。

また、本プロジェクトでは地域の現場を理解するコーディネーターが活動のハブとして関わる体制を構築する。全体を統括するメイン・コーディネーターと、各地域に関わるローカル・コーディネーターが大学と地域の双方をつなぎ、地域の状況に即した活動を支援することで、地域に根差した実践的なプロジェクトとして展開する。

これらの取組を通じて、大学生と地域住民、地域おこし協力隊が継続的に関わる関係性や拠点の形成を図り、担い手の循環的な創出を促すとともに、関係人口の創出・深化を通じて、将来的には定住人口へとつながる仕組みの基盤づくりを目指す。

1.4 目標とする地域の成果

松之山地域では、空き店舗を活用し、大地の芸術祭の要素や地域の生活文化の価値に着目した「ふるさとマルシェ」を学生が企画・運営することで、若い世代の感性による新たな地域ブランドの創出や、農産物等の販売拠点の形成を図る。これを学生の学びのプログラムとして継続的に位置づけることで、学生を起点に地域の現役世代や子どもたちが混ざり合い、地域の魅力をともに考え発信していく交流拠点の形成を目指す。あわせて、地域おこし協力隊と学生の関係づくりを通じて、学生にとっては地域で働くことや暮らすことのイメージを具体化する機会とし、協力隊にとっても活動の幅を広げる場となる。

松代地域では、田野倉集落の魅力である「農的暮らし」への参加を通じて、衰退が懸念される地域の伝統や文化を継承・発信する取組につなげる。農的暮らしを実践する世代が高齢化している中で、学生のフィールドワークを通じて地域の価値を再発見し、都市部の人材も含めた関係人口の創出を図るとともに、将来にわたり集落の暮らしを支える人材育成につなげることを目指す。

さらに、両地域の取組を「ふるさと」をテーマに展開することで、自然とともに営まれてきた暮らしの知恵や助け合いの文化、農的暮らしの魅力を学び合う機会を創出し、学生が地域に継続的に関わる関係

人口へと発展していくことを目指す。また、学生と地域おこし協力隊がともに場づくりに関わることで有機的な関係を築き、学生が卒業後も地域と関わり続ける仕組みとして、大学 OG によるコミュニティ形成や現役学生の活動支援につなげていく。

こうした関係人口の循環を支えるハブ機能を、全体コーディネーターである(一社)里山プロジェクトが担うことで、大学と地域を結びつけ、地域課題に応じた多様な学生活動を生み出す仕組みの構築を図る。さらに、市としても地域おこし協力隊や新規就農、移住定住などにつなぐ受け皿を整備し、関係人口から定住人口へのステップアップを促す仕組みの形成を目指す。

2. プロジェクトの具体的成果

2.1 プロジェクトの成果サマリ

2.1.1 主体形成

本プロジェクトでは、域外の大学生が地域課題や生活文化を学ぶフィールドワークを通じて、地域への関わりを深めるとともに、企画の立案から運営に至るまで主体的に関与する機会を創出した。学生は地域住民へのヒアリングや地域資源の掘り起こしなどの活動を通じて地域への理解を深め、その成果をもとに地域の人々と協働しながら企画づくりや実施に携わった。

こうしたプロセスを通じて、学生が地域との関わりを自らの学びや活動として主体的に捉えるようになり、単発的な体験にとどまらず、継続的に地域に関与しようとする意思の醸成が見られた。

また、これまでの大学と地域との連携では、学生が参加者として関与する側面が強かったが、本プロジェクトでは企画・実践の担い手として関わる機会を設けたことで、参加型の関与から主体的・継続的な参画へと発展させる取組となり、従来の連携の枠組みを一步進めるアップデートにつながった。

2.1.2 ネットワーク形成

本プロジェクトでは、域外の大学生を起点として、大学関係者や日野市住民、自治体関係者など、地域内外の多様な主体が関わる新たな連携ネットワークが形成された。学生のフィールドワークや企画活動を通じて、地域住民、地域おこし協力隊、大学教員、自治体職員などが相互に関わる機会が生まれ、それぞれの立場や専門性を活かしながら地域の課題や魅力について共有する関係性が構築された。

また、拠点となる場の整備や活動の積み重ねにより、プロジェクト期間中の取組にとどまらず、関係者同士の交流や協働が継続していく基盤が形成された。こうしたネットワークは、今後も学生の継続的な関与や地域人材との協働を通じて発展していくことが期待され、プロジェクト終了後も関係性が持続・発展していく構造の確立につながっている。

2.2 プロジェクトおよびフィールドワークの活動実績

2.2.1 ふるさとマルシェを核とした地域魅力発信・交流拠点づくりプロジェクト

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

松之山地域では、中心部の店舗の閉店が相次ぎ、住民が気軽に立ち寄り交流できる場が失われつつあることが課題となっている。このため、空き店舗を活用して学生と地域住民が関わる活動拠点を設け、「ふるさとマルシェ」を核とした地域交流と魅力発信の場を創出する。

マルシェを学生の学びのプログラムとして位置づけることで、学生が地域資源や生活文化を学びながら地域活動に主体的に関わる機会をつくり、地域住民や子どもたち、地域おこし協力隊など多様な主体が交わる場を形成する。

こうした取組を通じて、地域のにぎわいの創出と地域の魅力発信を図るとともに、学生の継続的な関与を通じた関係人口の創出と、地域の担い手の裾野の拡大につなげることを目的とする。

2) 活動方法・内容

松之山地域において、中心部の店舗閉店により住民が気軽に立ち寄れる交流の場が減少しているという地域課題を踏まえ、空き店舗を活用した地域交流・魅力発信の拠点づくりに取り組んだ。

具体的には、域外の大学生が地域住民や地域おこし協力隊等と連携し、地域資源や生活文化の魅力を掘り起こすフィールドワークを実施した。学生は地域の方々へのヒアリングや現地調査を通して、地域の農産物や暮らしの知恵、文化的背景などを学び、その成果をもとに地域の魅力を発信する企画として「ふるさとマルシェ」を立案した。

マルシェの企画・運営は、学生が主体となり、地域住民や関係者と協働して実施した。地域の農産物や加工品の販売、地域の魅力を紹介する企画などを通じて、地域内外の人が気軽に立ち寄り交流できる場を創出した。

また、こうした取組を学生の学びのプログラムとして位置づけることで、継続的に学生が地域に関わる仕組みづくりを進め、地域の魅力を発信する拠点としての活用を図った。

3) 活動の工夫点

本プロジェクトでは、学生が単なる参加者にとどまらず、地域の人々と協働しながら企画立案や運営に主体的に関わる形で活動を進めた点が特徴である。これにより、学生が地域課題を自分事として捉え、主体的に地域に関与する機会を創出した。

また、地域住民や地域おこし協力隊など多様な主体が関わる形で活動を展開することで、地域の人々と学生が相互に学び合う関係を形成した。学生の視点や感性を取り入れることで、地域の魅力の新たな発見や発信につながる取組となった。

さらに、空き店舗を活用して活動の拠点を設けることで、単発のイベントにとどまらず、学生の学びの場と地域の交流の場が重なり合う継続的な活動の基盤づくりを進めた。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

松之山地域では、学生と地域住民が継続的に関わる拠点づくりを目的として、空き店舗を活用したフィールドワークを実施した。まず、地域資源や地域課題を把握するため、地域住民へのヒアリングや現地調査を行い、豪雪地帯ならではの暮らしの知恵や農産物、生活文化の価値について理解を深めた。

その上で、地域の魅力を発信する取組として「ふるさとマルシェ」の開催に向けたワークショップを行

い、学生が主体となって企画立案、広報、当日の運営を担った。また、地域との関係構築を図るため、地域住民とともに米作りの作業をサポートするなど、地域の日常的な活動にも参加した。

さらに、学生と地域住民が継続的に交流できる場を創出するため、空き店舗を活用した地域拠点の整備に取り組み、学生による改修アイデアの検討や改修作業の施工を地域住民と協働で実施した。



(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

本プロジェクトでは、地域住民と学生が協働して「ふるさとマルシェ」を開催し、9月にミニマルシェ(来場者約70名)、11月にマルシェ(来場者約80名)を実施した。幼児から高齢者まで幅広い世代の地域住民が訪れ、域外の大学生の活動をきっかけとして地域に新たな賑わいが生まれた。

また、空き店舗の改修が完了し、学生と地域住民が継続的に関わりながら地域の魅力を発信する拠点が整備された。この拠点は、学生の学びの場としての活用に加え、地域住民が交流し地域の魅力を発信していく場としての活用が期待される。

さらに、学生が地域住民や地域おこし協力隊と協働して活動を進めたことで、域外の大学生が地域課題や生活文化への理解を深め、地域に継続的に関わろうとする意識が醸成された。

2.2.2 農的くらしの学びと継承の拠点づくりプロジェクト

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

松代地域の田野倉集落では、棚田や山の恵みを生かした「農的くらし」や地域の伝統文化が受け継がれてきたが、それらを実践する世代は高齢化しており、生活の知恵や文化を次世代へ継承していくことが課題となっている。

本プロジェクトでは、こうした地域の暮らしや文化を学びの資源として捉え、大学生が、地域の暮らしや文化に触れるフィールドワークを実施するとともに、地域住民や地域おこし協力隊と協働しながら空き家を活用した拠点づくりを進める。

これにより、地域の価値を再発見しながら外部人材である学生が地域と継続的に関わる関係性を育み、「農的くらし」の学びと継承の拠点を形成することで、地域文化の継承と関係人口の創出につなげることを目的とする。

2) 活動方法・内容

松代地域の田野倉集落をフィールドとし、地域の暮らしや文化を学びながら拠点づくりを進めるフィールドワークを実施した。

まず、学生が地域住民とともに米作りのサポートや収穫祭への参加など、棚田を中心とした「農的くらし」の実践に関わる活動を行った。こうした活動を通じて、地域住民から暮らしの知恵や生活文化についての聞き取りを行い、地域の価値や課題について理解を深めるとともに、住民との関係構築を図った。

また、地域住民や地域おこし協力隊と協働し、地域の空き家を活用した拠点整備に取り組んだ。学生は地域調査を通じて空き家の活用方法を検討し、改修に向けたアイデア出しを行うとともに、実際の改修作業にも参加した。これにより、地域の暮らしや文化を学びながら、地域と学生が継続的に関わるのできる拠点づくりを進めた。

3) 活動の工夫点

本プロジェクトでは、学生が地域の生活や文化に主体的に関わる形で活動を進めた点が特徴である。これにより、学生が地域課題を自分事として捉え、主体的に地域に関与する機会を創出した。

具体的には収穫祭への参加など、農的くらしを体験する活動を通じて、地域住民との交流や対話を重ね、暮らしの知恵や文化的価値を学び、また、地域おこし協力隊と協働しながら空き家改修を進める中で、地域文化を「知る」だけでなく、「自らどう関わるか」主体的に考える意識を醸成するフィールドワークに取り組んだ。また、地域の暮らしに直接触れ、空き家改修を単なる空間整備ではなく、地域文化を未来につなぐ場として位置づけることで、文化継承と関係人口創出の基盤づくりを進めた。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

松代地域では、「農的くらし」の学びと継承の拠点を形成することで、地域文化の継承と関係人口の創出につなげることを目的として、集落行事への参加を通じた文化的価値を学ぶフィールドワークの実施や空き家改修を行った。学生が米作りのサポートや集落行事、地域の収穫祭への参加など、地域の暮らしに関わる活動に継続的に参加した。これらの活動を通じて地域住民への聞き取りを行い、棚田を中心とした農的くらしや生活文化について理解を深めるとともに、地域住民との交流を重ねることで信頼関係の構築につながった。

また、地域住民や地域おこし協力隊と協働し、地域の空き家を活用した拠点整備に取り組み、改修作業を進めた結果、1月に空き家の改修が完了した。



(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

本プロジェクトを通じて、学生が地域の暮らしや文化を実践的に学ぶ機会が創出されるとともに、地域住民と域外の大学生との継続的な交流関係の基盤が形成された。

また、改修された空き家は、地域の暮らしや文化を学び合う場として、学生と地域住民が継続的に関わる拠点としての活用が期待される。これにより、地域の生活文化を学びながら関係人口の創出や地域との関係性を深めていく取組の基盤が整えられた。

さらに、本フィールドワークを通じて地域の暮らしや文化に関心を持った学生の中には、田野倉集落を卒業論文の研究テーマとして検討している学生もあり、大学における教育研究活動として地域との関係が継続していく可能性がうかがえる。

2.3 地域の成果と今後の展開

2.3.1 目標とする地域の成果に対する評価

本事業では、大学生と地域住民が協働して地域の魅力を発信するとともに、継続的に交流できる拠点を形成し、関係人口の創出につながる仕組みを構築することを目標としていた。

松之山地域では、学生と地域住民、地域おこし協力隊が協働してふるさとマルシェの企画・運営を行い、地域住民に加え大学OGや大学のある東京都日野市の住民も参加するなど、地域内外の交流の場が創出された。また、空き店舗の改修によりマルシェの継続開催や日常利用に対応できる環境が整備され、学生と地域住民が継続的に関わり合う基盤が形成された。これにより、関係人口の創出・拡大につながる仕組みが構築されたと評価できる。

松代地域では、学生が米作りのサポートや収穫祭への参加など農的くらしの実践を通じて地域住民との交流を深めるとともに、生活文化の聞き取りなどを通じて地域への理解を深めた。また、地域住民と協働して空き家の改修を進めたことで、地域文化や生活文化の価値を学び伝える拠点が形成された。これらの取組により、地域内外をつなぐ関係性が構築され、文化継承と関係人口創出の基盤が整ったと評価できる。

以上のことから、本事業は当初目標としていた地域の成果に対して概ね計画どおりの成果が得られたものと評価できる。

目標とする地域の成果(実施計画書)	達成状況・結果評価
大学生が地域に関わりながら地域の魅力や暮らしの価値を発信するとともに、継続的に交流できる地域拠点が形成され、関係人口の創出につながる状態を目指す。	○ 学生と地域住民、地域おこし協力隊が協働してマルシェの企画・運営を行い、地域住民が集う交流の場が創出された。また、大学OGや大学のある東京都日野市の住民も参加するなど都市部との交流が広がった。さらに、空き店舗の改修により地域の交流拠点が整備され、地域の魅力発信や交流の場として活用できる基盤が形成されたため。
大学生が地域住民と関わりながら地域の暮らしや文化を学び、地域固有の資源を活かした活動を通じて地域文化や生活文化の価値を次世代へ伝える拠点が形成される状態を目指す。	○ 学生が米作りのサポートや収穫祭への参加など農的くらしの実践に関わり、地域住民との交流を深めながら地域文化や生活文化への理解を深めた。また、大地の芸術祭や棚田など地域固有の資源を学ぶ活動と並行して空き家の改修を進め、1月に改修が完了し、地域文化や生活文化の価値を学び伝える拠点が形成されたため。
2拠点のプロジェクトをモデル事業として、ワクワク感としての体験・経験・	○ 学生と地域住民、地域おこし協力隊が協働し、マルシェやフィールドワーク、空

学びの循環をもとに現役学生と OG、そして地域の協働・共創を生み出す多様なプロジェクトが生まれ「学び合いの豊かなコミュニティ」が市域に広がっていく。「里山プロジェクト」がその活動展開のハブとなって、大学と地域をつなぎ、地域の課題に応じて、地域と学生活動を多様に生み出し地域人材を循環的に育成する拠点となる。	き家改修など複数の取組が連動して実施され、体験・学び・交流が循環する仕組みが形成されつつある。また、現役学生に加え大学 OG や都市部住民の参加も見られ、多様な主体による関係性の広がりが確認できた。 さらに、「里山プロジェクト」を中心として、大学と地域をつなぐ役割が具体的な活動として機能し始めており、地域課題に応じた学生活動の展開や交流機会の創出が図られている。
--	--

2.3.2 今後の展開

本事業を通じて、学生と地域住民が関わりながら地域の魅力や暮らしの価値を学び合うフィールドワークの有効性が確認された。今後は、本事業で整備した地域拠点を活用しながら、地域住民と大学生が継続的に関わる取組として発展させていく。

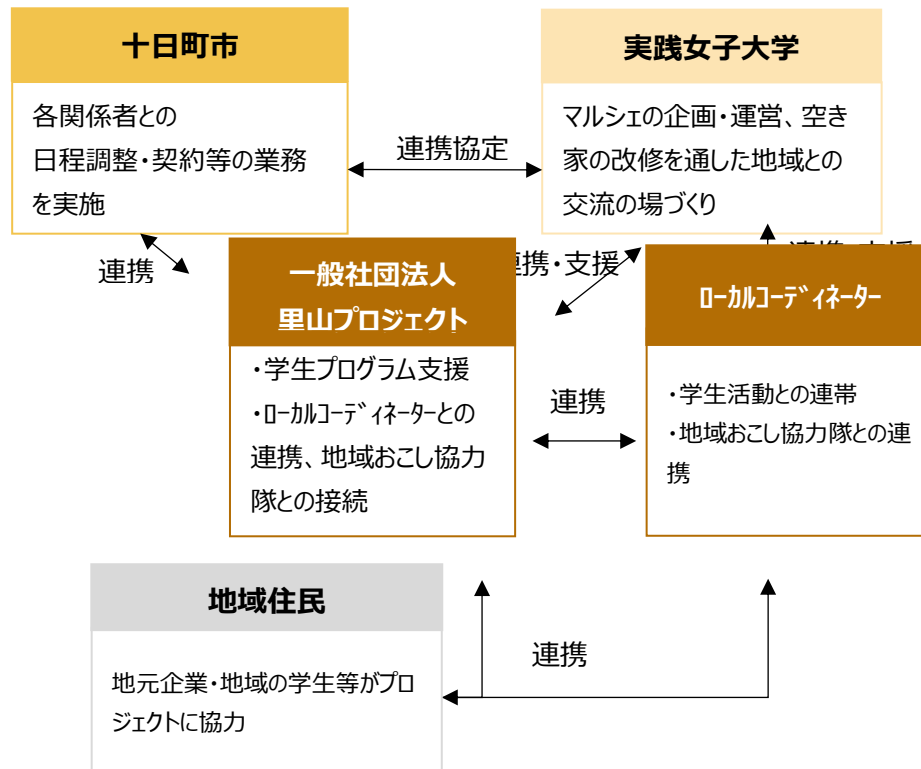
松之山地域では、本事業において空き店舗を改修し、地域の交流拠点として活用できる環境を整備した。今後は、この拠点を地域住民が日常的に利用できる場として活用していくとともに、学生によるマルシェの継続開催などを通じて、地域住民が気軽に立ち寄ることができる仕組みづくりを進めていく。また、地域住民と学生が共同で企画するイベントや交流活動などを通じて、地域内外の人々が交流する場としての機能を高め、地域の魅力発信や賑わいの創出により地域の活性化につなげていく。こうした取組を通じて、地域外の人々が継続的に地域と関わる関係性を育み、関係人口の拡大にもつなげていく。

松代地域では、空き家の改修により地域の暮らしや文化を学び合う拠点が整備された。今後は、この拠点を活用しながら、棚田や農的暮らし、地域の生活文化など地域固有の資源を学ぶフィールドワークを継続的に実施し、学生と地域住民が関わりながら地域文化の価値を次世代に伝える取組として発展させていく。また、学生による調査研究や地域活動への参加を通じて、地域との継続的な関係性を育み、関係人口の創出につなげていく。

さらに、本事業を契機として構築された実践女子大学との連携関係を今後も継続・発展させるとともに、十日町市として学生のフィールドワークを支援する取組を進めていく予定である。具体的には、学生等の交通費や宿泊費を支援することで地域での活動機会を広げ、地域住民との交流や地域理解を深める機会を創出していく。こうした取組を通じて、域外の大学生を起点とした地域の魅力発信を進めるとともに、交流人口のみならず関係人口の拡大や地域のファンづくりにつなげ、将来的な移住・定住の可能性を広げていくことを目指す。

3. プロジェクトの実施体制

3.1 プロジェクト体制の全体像



3.2 プロジェクト体制内の役割

所属/氏名	本プロジェクトにおける役割
自治体	
十日町市企画政策課 酒井潤	・大学との連携・調整、大学との契約等の業務、プロジェクトの進捗管理 ・コーディネーターやローカルコーディネーターとの連携・調整
大学高等教育機関	
実践女子大学 生活科学部 現代生活学科 教授 須賀由紀子	・自治体、コーディネーター、ローカルコーディネーターとの連携・調整 ・松之山地域でのフィールドワークの実施 ・学生の安全管理
実践女子大学 環境デザイン学部 環境デザイン学科 准教授 一色ヒロタカ	・自治体、コーディネーター、ローカルコーディネーターとの連携・調整 ・松代地域でのフィールドワークの実施 ・学生の安全管理
コーディネーター	
一般社団法人里山プロジェクト 代表理事 小山友誉	・自治体、大学、ローカルコーディネーターとの連携・調整 ・フィールドワーク時の支援 ・地域おこし協力隊との接続

プロジェクト参加学生	
須賀ゼミ生 8名	・松之山地域でのフィールドワークの実施(企画のアイデア出しから実装の協議、マルシェの運営) ・地域住民や地域おこし協力隊との連携
一色ゼミ生 12 名	・松代地域でのフィールドワークの実施(企画のアイデア出しから改修施工) ・地域住民や地域おこし協力隊との連携

4. スケジュール

実施時期	活動実績
2025年5月	
2025年6月	
2025年7月	【松之山】7/30-8/3:フィールドワーク実施(5日間/4名参加) ・空き店舗調査、ワークショップによる空き店舗活用のアイデア出し、マルシェ実施に向けた地域資源調査など 【松 代】7/10-11:プロジェクト内容の協議 7/30-31:フィールドワーク実施(2日間/4名参加) ・空き家調査、地域資源調査、ワークショップによる空き家活用のアイデア出しなど
2025年8月	【松之山】8/17-20:フィールドワーク実施(4日間/4名参加) ・ワークショップによる空き店舗活用の検討、マルシェ実施に向けた地域資源調査など 8/28-9/1:フィールドワーク実施(5日間/4名参加) ・少子高齢化の著しい地方のまちを維持するため市民リーダーの取組の現状と課題について現地学修、マルシェの企画具体化など 【松 代】8/14-20:フィールドワーク実施(7日間/12名参加) ・空き家改修作業、地域文化の体験や集落住民との交流を目的に集落行事「納涼盆踊大会」に参加など
2025年9月	【松之山】9/8-11:プレイベント開催に向けた打ち合わせ・準備 9/19-23:フィールドワーク実施(5日間/6名参加) ・プレイベントのマルシェの準備、当日運営、振り返りなど 【松 代】9/27-29:フィールドワーク実施(3日間/5名参加) ・空き家改修作業、空き家活用の検討、地域資源調査など
2025年10月	【松之山】10/16-18:マルシェ開催に向けた準備 10/25-26:マルシェ開催に向けた準備 10/31-11/2:フィールドワーク実施(3日間/6名参加) ・マルシェの準備、当日運営など 【松 代】10/25-27:フィールドワーク実施(3日間/10名参加) ・空き家改修作業、農的暮らしの集落行事「収穫祭」に参加
2025年11月	【松之山】11/22-24:フィールドワーク実施(3日間/4名参加) ・空き店舗を活用したマルシェについて関係者への報告会、集落行事の理解を深めるため、収穫祭への参加など 【松 代】11/29-30:空き店舗の工事に yönelik 現地調査

	・マルシェの工事に向けた現地調査、施工業者との打ち合わせ
2025年12月	
2026年1月	
2026年2月	【松代】2/26-28:フィールドワーク実施(3日間/12 名参加) ・マルシェの棚製作、地域住民との交流、次年度以降の打ち合わせ
2026年3月	

5. プロジェクトを通じて得られた効果

5.1 地域における効果

5.1.1 プロジェクト前後の変化

空き店舗や空き家の活用が進まず、中心地の賑わいの減少や地域文化の継承が課題となっていた。また、少子高齢化による担い手不足から地域に根付く生活文化や農的暮らしの価値についても、その継承が課題となっていた。本プロジェクトでは、松之山地域での空き店舗の改修やマルシェの開催などを通じて、地域住民と来訪者が交流できる拠点づくりを進めた。その結果、地域内外の人々が集い、対話や活動が生まれる具体的な場が形成され、交流や新たな活動が生まれる環境が整った。また、松代地域においては、地域に根付く農的暮らしや生活文化に学生が継続的に関わることで、地域の生活文化を学び、その価値や魅力を外部へ発信する取組が生まれた。これにより、地域文化の継承と情報発信が同時に進む環境が整った。

さらに、大学 OG や日野市住民の参画により、継続的な関係人口の基盤となる新たなネットワークが形成された。

5.1.2 得られた示唆

外部人材との協働は、地域資源の再発見の契機となる。

拠点の存在が関係の継続性を支える。

本プロジェクトを通じて、外部人材との協働が地域資源の再発見や価値の再認識につながる事が確認された。地域にとって当たり前となっている暮らしや文化であっても、域外の視点を取り入れることで新たな魅力として再認識の契機となり、地域活動の新たなテーマや展開の可能性が見出されることが示された。また、継続的な交流を生み出すためには、単発のイベントだけでなく、人が集まり関係を深めることのできる拠点の存在が重要であることが明らかとなった。拠点があることで、地域住民と関係人口が継続的に関わり合う場が確保され、活動や交流が循環的に発展していく基盤となる。今後の地域づくりにおいては、こうした拠点を核としながら、多様な主体が関わる関係性を育てていくことが、持続的な地域活性化につながると考えられる。

5.2 自治体における効果

5.2.1 プロジェクト前後の変化

これまでの大学との連携は、個別の事業や調査、イベント開催など単発的な取り組みとなることが多く、継続的な連携体制の構築には至っていなかった。また、関係人口の創出についてもイベント参加などの一時的な関わりで、その後の継続的な関係形成へと発展しにくいという課題があった。本プロジェクトでは、大学の教育活動と地域の拠点づくりを結びつけることで、大学と地域が継続的に関わるモデルを構築した。拠点を核として学生や関係者が地域に関わり続ける仕組みが形成され、事業終了後も大学の学びと地域活動が循環的に展開される基盤が整えられた。また、日野市産業まつりへの参加など新たな連携の機会も生まれ、大学を通じた地域との交流の広がりが確認された。これにより、自治体と大学の協働が地域づくりにおいて継続的に機能する可能性が示された。

5.2.2 得られた示唆

域外の大学生が主体的に地域活動に関わることにより、地域への愛着や「ふるさと」としての意識が醸

成され、関係人口としての関与が深まる可能性が示された。単なる参加者ではなく、企画や運営など主体的な役割を担うことで、地域との心理的な距離が縮まり、継続的な関わりへと発展しやすくなる。また、拠点整備を行うことは、活動の継続性を高める上で有効であることが明らかとなった。拠点を中心に人材や活動が集まり、学びや交流が循環することで、地域全体が共創や学びのフィールドとして機能する可能性がある。今後の自治体施策においては、大学との連携を単発事業にとどめず、拠点や仕組みづくりを含めた継続的な関係構築として位置付けることが重要であると考えられる。

5.3 大学における効果

5.3.1 プロジェクト前後の変化

大学における地域フィールドワークは、これまで調査や実習など短期的な学習活動として実施されることが多く、地域との関係が継続的に発展する仕組みとしては十分ではなかったが、本プロジェクトでは、地域に拠点を設け、学生が継続的に地域と関わる活動を展開したことで、教育と地域実践を結びつけた新たな学びの形が構築された。学生は調査や学習にとどまらず、マルシェの企画運営や空き店舗・空き家の改修など具体的な活動に関わることで、地域課題を理解し、その解決に向けた取組を経験することができ、これにより、大学の教育・研究活動が地域課題の解決や拠点づくりへと展開し、地域と連携した実践的な学びが形成された。

また、本プロジェクトによる地域での活動を通じて、地域社会そのものを継続的な教育・研究の実践フィールドとする取組として展開されつつあり、十日町市を「サテライトキャンパス」のような学びの場として活用していく可能性が示された。

5.3.2 得られた示唆

本プロジェクトを通じて、地域との協働は大学にとって教育・研究の実践的な展開を促す重要な機会となることが示された。地域を学生が継続的に関わりながら学ぶ実践フィールドとして位置づけることで、大学教育と地域活動を結びつけた新たな学びの形が生まれる可能性が示唆された。また、学生が主体的に地域課題に関わる機会を設けることで、問題解決能力やコミュニケーション能力など、社会で求められる力を育成することが可能となる。さらに、大学が地域と継続的な関係を築くことで、教育・研究成果が地域社会に還元されるとともに、地域から新たな研究課題や学びのテーマが生まれるという相互的な価値創出が期待される。

5.4 学生における効果

5.4.1 プロジェクト前後の変化

学生にとって地域は、これまで授業や実習の一環として訪れる学習の場として認識されることが多く、活動への関わり方も与えられたプログラムに参加するという意識が強かったと思われる。本プロジェクトでは、学生がマルシェの企画立案や運営、空き店舗・空き家の改修などに主体的に関わる機会が設けられた。これにより、学生は地域を単なる学習の対象ではなく、自ら関与し行動する場として捉えるようになった。また、地域住民や関係者との対話や協働を通じて、地域社会の課題や価値を理解する経験を得た。こうした活動を通じて地域への愛着や関心が高まり、卒業後も地域との関係を継続しようとする動きも見られるようになった。学生にとって地域との関わりが一時的な学習体験にとどまらず、将来的な社会との関係性を考える契機となった。また、活動を通じて地域おこし協力隊など地域での仕事に関心を示す学生も見られるなど、地域との関わりを将来的な進路として捉える動きも生まれつつある。

5.4.2 得られた示唆

学生の主体性を引き出すためには、単なる体験型の学習ではなく、責任ある役割を担う実践的な経験を提供することが重要であることが示された。企画や運営など具体的な役割を担うことで、学生は自ら課題を考え行動する姿勢を身につけるとともに、活動への当事者意識を高めていく。また、地域住民との対話や協働の経験は、地域社会への理解を深めると同時に、多様な価値観に触れる機会となり、学生の視野を広げる効果をもたらす。こうした実践的な学びの積み重ねは、地域との継続的な関与や社会参加への意欲を高めることにつながる。大学教育において地域との協働を取り入れることは、学生の成長と地域社会への貢献を同時に実現する有効な取り組みであると考えられる。

令和7年度大学等と地域が連携して取り組む地域課題解決プロジェクト(ふるさとミライカレッジ)
成果報告書

[プロジェクト名:若者の視点を取り入れた「学びを軸とした地域構築の実践」プロジェクト]

令和8年3月13日

新潟県十日町市
